

海 (かいし) 市 No.4

● 詩

- 02 前田 勉 紐
- 04 横山 仁 ということです、暮鳥さん

● エッセイ

- 06 佐藤ただし 水田とツバメ (2)
- 09 片津 森 石仏を数えて
- 15 横山 仁 雑記 (4)

紐

前田 勉

沈黙の中に世界があった
闇の中から垂れてきた紐が
私を吊るすものとは知らなかったが
その世界でも時間は刻まれ
刻む秒針の音を知る者だけが
その紐を見ることができた

きつと

私にはその紐が見えていたはずだ

解けなくなった記憶の混沌

光を探してさりげなく逃げてゆく

思わせぶりに語る女のように

物語を抱えてだ

時に掘り起こされ

時に碎かれ

時に執拗に埋め戻され

ながら

沈黙の世界を機械的に往復しているもの

感じ得ない余白が少しだけずれて

気が付かないままにしてしまったもの

沈黙の中にも世界があつて

瞼の裏側ではじけ飛ぶ気泡のような

闇

そこから垂れてくる紐が

私を捕らえるものだとは知らなかった

とらうことです、暮鳥さん

横山 仁

いちめんのリーク
いちめんのリーク
いちめんのリーク
かんけいしゃのはなし

いちめんのリーク
いちめんのリーク
いちめんのリーク
じょうほうのろえい

いちめんのリーク

いちめんのリーク
いちめんのリーク
おうむのしんじつ

いちめんのリーク
いちめんのリーク
いちめんのリーク
せんとうゆうどう

ますごみのふうけい

* 「週刊アキタ」(二〇一〇年四月三十日号) に掲載したが、
行数の制限でつめたところを訂正した。

水田とツバメ (二)

佐藤 ただし

自宅と隣接する作業小屋の一階にツバメの巣があり、そこにツバメが一羽、丸い頭と細長い尾羽を出してここ何日間かタマゴを温めている。

この作業小屋は昭和三十年代に建てられたもので、ツバメの巣も間もなくできたものだと思う。時々気になつて覗きに行くと、私に気付いて頭部をくるりと回してこちらを見下ろす仕草をする。

ここ一〇年程、この巣が利用されることは無かつた。毎年この季節になると引つ切り無しに何羽も出入りするのだが、何か気にいらぬ理由があるのか、敬遠されてしまうのだ。そこでツバメになつたつもりでこの作業小屋を見てみると、農作業に使う草刈り機や用途のわからない段ボール箱などが乱雑に置かれているの

が原因かなと思われた。また、巣の近くに赤外線ランプの配線が走り、タマゴを生みヒナを育てる神聖な場所としては不適當だと思われたのかも知れない。

さらに巣の周辺には糞を蓄えるタンクが増設され、巣が作られた当時とは状況が変わつてしまったことも一因と考えられる。

そこで作業小屋の片づけに取りかかり、不要な箱を捨てたり、配線を撤去して巣の周りをすっきりとさせた。また、古い巣から少し離れた場所に板を打ち付け、新たに巣作りしやすいように、お椀状のカゴを取り付けて様子を見ることにした。

間もなく二羽のツバメが小屋を出たり入ったりするようになり、隣家の屋根や作業小屋の蛍光灯に並んでとまり、この「物件」の品定めをしている姿を見かけるようになった。

その後一週間ほどして、このツバメが古いほうの巣に入り、巣の手直しするようになった。私が作った新しい巣は採用されなかつたが、どちらの巣でも使つてもらえればうれしい限りだ。

ツバメは気温の上昇とともに日本を北上してくる



作業小屋の巣に入ったツバメ



不採用になった巣皿



作業小屋の軒先にあるリングに止まったツバメ

が、平均気温が九度前後（八〜一〇度）になる頃にその地方に渡来するという。（大田眞也著【ツバメのくらし百科】）

秋田には四月一〇日頃にやって来てヒナを育て、九月二〇日頃に育てたヒナとともに帰って行く。この期間は秋田では丁度稲作の時期と重なる。農家も四月に

なるとスイッチが入ったように動きだす。日の出とも一緒に起きだし、日が暮れても家に入ろうとしなくなる。季節という軸のもとに、私達の暮らしとツバメをはじめとした自然界の生き物達の暮らしがシンクロしていることに気付かされる。

手元に日本野鳥の会が発行した（ツバメ全国調査

2013～2015結果報告」というリーフレットがある。それによるとツバメがやって来ても、フンで汚れるなどを理由にツバメの巣を壊す家もあり、都市部では人が巣を撤去したりして、子育てに失敗した割合は一〇・六%、農村部では一・五%だという。

作業小屋にあるツバメの巣を見ていて、野鳥であるツバメがカラスやヘビなどの天敵からヒナを守るために人家に入って巣を作り、ヒナを育てるといふ、人と鳥との信頼関係がないと成立しない育雛方法がいつ頃から定着していったのか、またこれは日本だけのことなのか興味は尽きない。

このリーフレットには、日本ではツバメが巣を作った家には幸福が訪れると古くから親しまれていたと書かれていた。我が家でもツバメが作業小屋に出入りすると、戸を開けておき、巣の下に段ボール箱を置いて、床がフンで汚れないようにしていたが、ツバメの巣作りを邪魔しないのは、ツバメが蚊やウンカなどの害虫を食べてくれる益鳥だからだと思っていた。リーフレットにある、幸福云々については初めて知ることだった。

会社を退職して身近な自然に目が向くことが多くなった。ツバメと人との事柄にも気付かずに、長い年月を過ごしていたことになる。出来れば毎年、ツバメには我が家の古い作業小屋で巣作りをして欲しい。

(二〇一六年五月三日)

石仏を数えて

片津 森

春の晴れた日、金山滝口かなやまたき（秋田市太平木曽石地区）から中岳へ向かった。中岳は標高九五一メートル。途中、前岳にある女人堂跡まで一時間半、さらに一時間かけると山頂に着く。

この登山道には石仏や石碑が多く、昔は信仰の路であったことがわかる。これまで何気なしに、道端の石仏に目をやりながら登り下りしてきた路だった。以前『秋田市旭川郷土史』の中に、一八一二年に菅江真澄が太平野田口から太平山奥岳へ登った時の様子が説明されていて、興味深く読んだことがあった。この本の中に「野田口、木曽石口、仁別口などのルート沿線にそれぞれ三十三観音が配列されていた」と記されていた。木曽石口とはこの金山滝口のことと思うが、こ

の路に三十三カ所も観音様があったつけ、などと思いつつものほほんと登っていた。

去年、登山口から間近の金山滝神社を見下ろせる路傍に石仏を見つけたときは、まさかこんなところにと意外の感があった。何十回となく通った路なのにこれは見落としていた。か細い尾根の滝側の方がえぐられていたり、矢櫃沢側が切れ落ちていたりで足元に注意を払うことになり、それに石仏の面が風化して黒ずみ、苔が表面を覆っていて気づかなかつたのだ。そして、すぐに郷土史の記述のことが蘇った。三十三観音の一番目がこれではないか。一番（と思しき石）が分かれれば、順次数えてみたくなるのが人情。そして年を越して今日、思い立ってザックを背負ったのだった。

一番らしき石仏を左に見て、やがて路を左に下ると「参詣道」と刻まれた石柱が斜面に寝ている。丸太橋を渡って登りに入る。やがて平たい方形の石があった。これは二番の台座ではないか。さらに進むと「三番」と彫られた石仏があった。（さっきのはやはり二番だったし、去年発見したのは一番に違いない。）で、

三番の台座には「安政五年」と刻まれている。西暦一八五八年だから今から一五八年前の石だ。十五分後には「四番」の石仏があった。これらは皆、外周を舟形に象った中に観音像を浮き彫り（レリーフ）にしたものだ。

観音様は千手観音のようだったり、片膝を立てて蓮華を肩に担いだもの（後日、これは如意輪観音菩薩だと知った）だったりする。同じ観音様でもこうした形の違いは祈りの内容の違いも現しているのだろうと思つた。

四番から先はつづら折りの登りだ。七番、九番と数えて登る。本体の姿がなく台座のみが残っているのは六番とか八番の石仏のものなのだろう。やがて右手遠く木の葉越しに鳥居が見えてくると女人堂跡までもうすぐだ。路傍に石仏の十番を確認し、台座とみられる石も数えながら進んでいくと、「金刀比羅宮」（刀の下に比をつけた一文字）と刻まれた立派な石碑が立っている。讃岐の国の金毘羅さんの信仰が秋田の方に来ていたのかと、やや不思議。石の側面には「安政六年未七月建立」とあった。ここに来るまで見てきた

石仏にも嘉永とか安政という年号の刻まれたものがあったので、帰宅後年表をみると、当時はロシアやアメリカの船が日本沿岸に出没し、通商を迫ってきた時代だった。そして、その圧力を脅威に感じた幕府から、久保田藩などはロシア船対策として蝦夷地北部の警護に付かせられたりした、と秋田県の歴史本に書いてあった。また、安政二年の大地震により藩の江戸屋敷が被災し、その修繕に思わぬ出費がかさむなど、藩財政は緊縮一方の苦しい時期でもあったようだ。

そんな時代に、人々がどんな願いを石仏にこめたものか。また、この重いものをどのようにして運んだものか。滝を過ぎてすぐの急坂など大変なことだろう。木を四角に組んだものに石仏を縄で縛って載せて、数人がかりで引き上げたりしたのではないか。雪の堅く締まった残雪期にソリに載せて運び上げるなどということもあつたかもしれない。

お昼前に女人堂跡の鳥居の前の見晴らし台に着いた。その入り口に方形の石があることに気がついたのは去年だった。側面に幾人かの名が並んで彫られてい

るから何かの台座だったのだろう。それまで見落とされていたのは草が繁茂してこの石を覆い隠していたためで、誰かがこの辺りをきれいに刈り払いした際に陽の目を見るようになったのではないか。

ここに着くまでの一時間半の間に石仏が六体あった。台座しか残っていないものは、本体が雪の重みを受けたり倒木に撃たれて倒れたのかもしれないが、どこに消えたのだろう。また、石仏や台座の石は必ずしも等間隔に置かれてはいなかった。次の番号の石仏まで一分で着いたり、五分かかったり十五分後だったりした。ここにも何かワケがあるのか。

女人堂跡の鳥居をくぐって階段を下りると、左にコンクリート製の台の上に小さなお宮が鎮座している。大分前に、ここに女人堂があつて興味本位で中を覗いたことがあつたが、平成十三年十二月に火事で焼失した。そこに神社が併設されていたと聞いたことがあるので、その神社も焼けたのだろう。その数年後、焼けた跡にこの小さなお宮が設置された。女人堂の方は焼ける前に何度か建て替えられたものだろうが、火災後は再建されていない。女人堂を北風から守るように立つ

ていた数本の杉は延焼を免れたが、火傷をしたような跡が残った。あれから既に十五年近く、杉はかなり高く伸びて火傷の跡はもう見えない。

このお宮と正対する位置に幾つか石仏などが並んでいる。その中に正方形に近い石がある。内容は横に三区分されて、左に「二十三夜女講中」、中に怒った顔の像、右に「二十六夜愛染明王」と彫られている。二十三夜については『秋田市太平郷土史』に「旧二十三夜に女性だけが集まつて二十三夜の月を拜むものである。お産は月の満ち欠けや潮の満干に關係があるといわれていることから、二十三夜半の月を拜む信仰となつたと思われる」という記述を見つけた。この山に登つて経を読んだり飲食や会話をし、月が出れば月に向かつて安産や子宝を祈つたのだろう。憤怒の表情の愛染明王については恋愛、縁結び、家庭円満などをつかさどる仏のようで、人々は（正月または）七月の二十六日の夜に月の出を待ち、愛染明王に祈るのだという。（ウィキペディアなどによる）

先ほど「金刀比羅宮」の石碑の前を通つたが、この境内にも「琴平大神」と刻まれたかなり古びた石が

あった。もうひとつ、ようやく「金毘羅」と読める文字の入ったこれも古い石があった。

○道草（一）

金刀比羅宮というのは海上交通の守り神だという。江戸時代の秋田で海上交通といえは北前船のことを連想する。秋田市土崎に金刀比羅神社があるが、『土崎港町史』をみると、この神社は土崎湊の廻船問屋が十八世紀半ば（宝暦年間）に今の地に造営した（それ以前も以後も変遷はあったようだが）。文政年間に松前増毛を準備する藩兵を派遣する際にもこの神社で海上安全を祈ったという。ということなら、この神社の氏子たちが講中をつくり、四国に詣でたり、金山滝から前岳へ登ったりしたことは、……な、なかったのだろうか。ただなあ、港の近くに金刀比羅神社というものがあるのに、わざわざ前岳の登山路に重い石碑を運んで信仰の跡を残すということは、……あ、あるだろうかなあ。そんなふうに想像する面白さはあるけれど。

女人堂跡から少し先へ進んだところの右手の高台に石仏などが並んでいる。その中に十四番、十七番、廿六番のほか五番の石仏があった。さつき登って数えてきた時に五番石仏と思えるような場所に、毀れた欠片を組みなおし積み上げた石仏があったが番号は分らなかった。なぜ五番石仏がここにあるのか、本当の五番石仏はどこの方か。

気分を新たに歩きはじめる。女人堂跡から二十分ほど過ぎたあたり、左上が崖になっているところに「廿七番」石仏を見つける。建立時期は不明だが、いよいよ三十番台に近づいてきたようだ。すぐ先に三角井戸の清水のあるところには壊れた石仏があった。一つではない。半分に埋もれていて、番号を確認するため掘り返してみようと手をかけてみたが、びくともしない。スコップは持参していないし、個人的な興味をもった者が一人でやる性質の作業ではないと諦めて左の急登に行く。ここから先が中岳登山のクライマックス、最も苦しいところだ。ゆっくり呼吸を整えながら登る。

急な岩場をこなすと、数分で山頂小屋の赤い三角屋根が見えるようになる。狛犬が迎えてくれたが、もはや風雪で形を失いかけている。以前は鳥居もあったのにいつの間にか倒れて朽ちてしまったようだ。ここが中岳（別称「木曾吉山」）だ。南に開かれた展望デッキのような特等席にザックが二つあったが人の姿は見えない。三角屋根の建物は神社で、横に石仏群が十体以上あるが、かなり風化している。さあどうだ、三十三番はあるか、と覗き込んだ目に初めて見る文字が入ってきた。「前」や「兼」の始めの三画部分の下に、「几」をくつつけた文字といえればいいか。これは三十の意味だろうか。横一の棒に川の字を重ねれば、昔、三十と読んでいたが、それとは違う。この文字の下には「四」という文字がついている。二つつなげて三十四か。

左隣りの石仏には、この不思議な文字の下に「一」がついているから三十一か？ 自分の思いとしては、せっかく三十三観音を見に登って来ているのだし、ところどころ欠落した番数があるものの、さつきは二十七番が立っていたのだから、山頂にある石仏は

三十番台であってほしいのだ。しかし、「三十三観音」という以上、一つ多い三十四番があるわけがない。ということとは、この不思議な文字も二十の意味で、ひとつの石仏は二十四番であり、その隣は二十一番ということになる。目を左隣りに移せば「二十三番」石仏があった。三十番台の石はない……。これは煎じ詰めれば三十三観音はあるにはあったが、百年、百五十年という歳月が半数以上の石仏を隠してしまった。そして石には数字が彫られているが、必ずしもその順番どおりに立っているわけではないということだろう。

そんな結論に落ち着いたものの、どこか気が抜けたまま石仏から離れて山頂の南面に立つと、残雪をいただいた鳥海山が優雅なすそ野を日本海方面に伸ばしている。この風景を江戸末期に石仏を運び上げた人たちも見たのだろう。そう思うと、自分が草鞋でも履いているような気がしてくる。ただ、昔の人たちが苦や願いを抱えてここまで登っていたのだらうと思うと、それに引き換え、自分がいかにも縮まりがないように思えてくる。漫然と送る六十代後半の一日をひたすら汗をだくだくさせながら登り、今は、石仏の番数に翻弄

されながらぼかんとしている。五月の陽気の中で、地面に腰を下ろして水を飲み握り飯を頬張っていると、繁った木々の奥から笑い声をたてながらザツクの持ち主の男二人が戻ってきた。彼らはスーパールのレジ袋をばんばんに膨らませて持っている。透けて見える中身は太く立派なタケノコだった。

○道草（二）

『秋田市太平郷土史』のページをめくって後ろの方に行く。「太平地区の講中」という部分がある。それを見ると、前岳の「金刀比羅宮」や「琴平」の石碑は港の人たちではなく、太平地区などの農民によって建立されたものではないかという気がしてきた。昭和三年の記録として、この太平地区では寺中・堀内地区に金毘羅講があつて、男四十名が入っていたと記されている。この人たちの先祖が、江戸末期に海上交通、たとえば土崎港で廻船問屋の仕事をしていたとするのはちよつと無理でしょう。（毎日港に通っていたとか家族から離れて港付近に住み込みで働いていた?）。『金毘羅信仰』（雄山閣出版）

によると、金毘羅宮は海上交通の守り神であるほかに、農民の信仰の対象でもあったようだ。干ばつ被害を受けぬよう雨乞いの神として信仰されていたという。こちらの方が理解しやすい。奥岳から前岳までの主稜線から、太平川をはじめ大小の沢伝いに流れ下る水が田を潤してほしい。あの金刀比羅宮の碑は、太平山系の麓にある江戸時代末期の農民たちのそのような祈願を現すものだったんだろう。山を下りてから数日、そんな空想が頭の中を巡っていた。

雑記 (4)

横山 仁

戦争が廊下の奥に立つてゐた

以前、『一行力』（岩永嘉弘、草思社）という本でみつけた俳句だが、こんな俳句もあるのか、こんな表現もできるのかと感嘆した。今なら、戦争が玄関で微笑んでいた、というふうになるか。しかし、これでは俳句にはならない。北川冬彦の一行詩「馬」（軍港を内蔵している。）などを連想するが、作者は渡邊白泉。この句は昭和14年、作者が26歳の時の作品である。白泉らの俳句は「新興俳句」とよばれたが、『国語大辞典』（小学館）では、次のように説明している。

《昭和六年の水原秋桜子、山口誓子の「ホトギス」

脱退をきっかけとした、俳句の近代化を目標とする俳句運動。特に無季派が次第に勢力を持ち、反戦的傾向に結びついて、同一五年に始まった俳句弾圧の犠牲となり、壊滅していった。》

この俳句弾圧について、俳人でもあるきつこは次のようにかいている。「きつこのブログ」（2005.08.19 「京大俳句事件」）

《だから、高濱虚子を中心に、分かりやすい伝統俳句を實踐してた俳句結社、「ホトギス」は良かったんだけど、難解な新興俳句を實踐してた「京大俳句」は、警察に目をつけられちゃったのだ。別に、反体制的なことなんかぜんぜん書いてないし、ただ純粋に文芸としての俳句を熱心に勉強してただけなのに、難解な新興俳句の数々は、頭の悪い軍国主義者たちには、何か恐ろしい呪文のように感じられたのだろう。つまりは、オツムの足りないトッコードもは、自分たちに理解できないものは、ナンでもカソでもカタツパシから、とりあえずビール……じや

なくて、とりあえず弾圧つてノリになっちゃったのだ。

そして、昭和15年の2月15日に、トッコーのアホどもは、「京大俳句」の幹部の8人、京都の井上白文地、中村三山、宮崎戎人、中村春雄、辻祐三、神戸の平畑静塔、波止影夫、東京の仁智栄坊をいっせいに不当逮捕したのだ。これが、俳句史上、最大で最悪の言論弾圧事件、「京大俳句事件」の始まりだった。そして、第2次の検挙で、東京の石橋辰之助、杉村聖林子、三谷昭、渡辺白泉、大阪の和田辺水楼、淡路の堀内薫が不当逮捕され、第3次の検挙で、西東三鬼が不当逮捕され、第4次の検挙で、島田青峰、東京三（秋元不死男）、古家樵夫、藤田初巳、中台春嶺、小西兼尾、細谷源二、林三郎、平沢英一郎、栗林一石路、橋本夢道、横山林二、神代藤平が不当逮捕された。

この、洗脳警察によるデタラメな逮捕は、どんどんエスカレートして行き、第4次の検挙になるころに

は、もはや「京大俳句」のみならず、どこの俳句結社に所属しているようとも、ちょっとでもおかしい俳句を詠んでいる俳人がいれば、すぐに「赤い俳人」と言うレッテルを貼り、カタツパシから逮捕したのだ。ここで、「洗脳警察」つて言う言葉を見て、すぐに「頭脳警察」を思い浮かべちゃった人たちは、もしも今が昭和15年だったら、それだけの理由で逮捕されちゃっただろう（笑）

この、正気とは思えないトッコーどもの呆れ果てた魔女狩りによって、何の罪もない俳人たちが不当逮捕され、ノミヤジラミだらけのブタ箱に1年も2年も留置され、連日、取調べと言う名の拷問を受け続けた。》

きっこは、「2010.08.16 警察による言論弾圧事件」もかいている。

俳句弾圧事件は、秋田にも及んだ。

県の広報誌「あきた」（通巻109号）1971年（昭

和46年)6月1日発行では、「碑の周辺」(第23回)で「文学殉難の碑(下)～加才信夫句碑と稲村容作詩碑 全国にも稀な俳句弾圧事件～」として解説している。「あきた」のバツクナソバーがネットでもよめることは、ありがたい)

◆ 「さそり座」事件

昭和十八年十二月六日、マルクス主義による反戦俳句や評論を掲載しているという理由で、俳誌《蠍(さそり)座》の編集者加才信夫と、創刊同人の高橋紫衣風の二人が検挙された事件も、北方教育事件の延長線上でとらえることができよう。

指弾された作品は、それより四年も前の同誌17号にのった袋足平の「俳句リアリズムへ模索」と、28・29号の高橋紫衣風「俳句の近代主義的脱謬について」という論文、鶴田虚壺子の

午前七時坑口霜滴りいのち吸われ行く

午後六時ハムソーの無垢を守り各の柔軟を打つ

など一連の作品だったといわれるが、今日これらを読んでみてマルキシズムの賢りなど、みじんも感ぜられない。高橋論文は新興派のうちでも、やや技巧におちいった日野草城ら《旗艦》による人々の作句態度を批判して、真の俳句近代主義は〈農村や工場から、積極的なあらゆる改革や、努力や、建設や健康な叫びをあげ〉〈社会的苦痛に抗して生きぬく鉄の如き信念から生まれた〉現代口語による科学的な体験的な時代性をもったものである、と主張しているにすぎない。そして、それを実践するものとして東京三(のちの秋元不死男)や細谷源二の句を例としてあげている。

◆ かげに文学報国会

昭和十五年、平畑静塔らが検挙された京大俳句事件を口火として始まった新興俳句、生活俳句への弾圧は、さらに石橋辰之助、西東三鬼らに及び、翌年は東京三、細谷源二も検挙されているから《蠍座》

も一派とみられたのであろう。

ただ一つ疑問なのは、なぜ、一地方の俳句同人誌にすぎない《蠹座》が、地方誌としては九州の某誌とたった二誌、これほどの仕打ちを受けねばならなかったのかということである。

このことについては、明らかに文学者を戦争協力に駆りたててることを目的にうたった〈日本文学報国会の結成(17年5月)に参与し、俳句弾圧事件の黒幕的存在〉(明治書院刊「現代日本文学辞典」・楠本憲吉)といわれる燕子小野賢一郎の果たした役割が追求されている。

俳誌《鶏頭陣》を主宰する燕子は秋田県内の俳壇にとくに影響力をもっていた。しかし加才信夫、鶴田虚童子(柴田正夫)ら有力な若手はじめ海軍で病気を得た高橋紫衣風が入院していた関係で国立本荘療養所の句友たちが、大挙して《鶏頭陣》から《蠹座》へ移ったことへの報復のため燕子が官憲へ刺したのではないか、という見方である。

事件の前、燕子は加才や鶴田へ当局の手入れをに

おわせ、蠹座の活動をやめるよう忠告めかした手紙を送って自陣営への復帰をすすめた事実があり、逮捕された高橋紫衣風(干畑村本堂城回・高橋紀茂^(平))は「担当検事から背後に小野燕子の指示が動いたことを聞かされた」と語っている。》

この後、加才らの紹介があるが、省略する。

なお、「蠹座」については、大河喜栄編『蠹座の軌跡』(平成元年)で詳しくしることができる(秋田県立図書館蔵)。このなかに、高橋紫衣風「距離のない砂山」[詩に転じた鶴田虚童子]、大河喜栄「柴田正夫の俳句と詩活動」といった柴田正夫論があるが、大河は、「こうし中で昭和十七年畠山義郎を知ったことで急速に詩に傾斜して行ったようである」とかいている。

俳句弾圧については、小堺昭三『密告 昭和俳句弾圧事件』(ダイヤモンド社、昭和54年)があるが、小堺は「あとがき」でかいている、「こういう時代は再びくる、駆足でやってくる、いま書いておかなば」と。

また、俳句ではないが、畠山義郎の「詩叢」も、昭和16年12月に発刊したが、昭和18年5月の18号で廃刊になっている。

合本した『詩叢 復刻版』(密造者の会)の「あとがき」で、畠山は書いている。

《困っていたら、秋田鉄道管理局労組の文化部の詩人が、秋田市の江川印刷所に交渉してくれた。その用紙の特配を受けたことが秋田県警察本部に知られてしまい、その時すでに十八号は印刷されていたが、県警はびっくりして、当時、用紙の配給はもちろんであるが、アメリカとの戦争に対する協力の傾向が見られない「詩叢」に特配は認められないということになった。そして、発行者、執筆者の検挙となり、執筆者が二人検挙され、発行者の私は未成年なので在宅監視となった。》

「詩叢」の17年5月号の「消息欄」に、「加才信夫氏 新参加」とあり、「受贈誌紹介欄」には「蠅座」がある。7月号には、加才とともに柴田正夫の詩も載っ

ているから、柴田は、このころ加才を通じて入ったものか。八月号の「後記」に

《秋田にも『詩話会』が出来て、柴田正夫兄や私が世話役になり第一回を催した。詩叢の人々の秋田人はいいてこれに抛つた。第二回も近く催される筈だ。加才信夫兄は、詩と俳句の交流に就いて実に考へてゐる。五百旗頭兄や柴田兄も俳人だ。先頃死んだ佐藤惣之助をはじめ、詩人が俳句をやつてゐる事は有名無名を問はず傾向的にさへなつてゐるのではなからうか。》(注、旧漢字は常用漢字に直した。以下同じ)

《八月末、秋田市で加才信夫氏、柴田正夫氏その他と会つたが非常に啓蒙された。加才氏は、現代詩と現代俳句は同一軌道をあゆむものであると自ら『蠅座』を主宰してゐる俳人であるが、柴田氏も又その最有カ同人として加才氏をたすけて居る人である。みなかつて詩をやつてゐたとか、数ヶ月前から本誌に再び詩筆を採つたのである。》(十月号、後記)

あとがき

◆「雑記」をかきながらよんだ俳句がおもしろかった。加藤郁乎は俳句を一行詩とよんだという、「春時雨一行の詩はどこで絶つか」(郁乎)。(J)

◆日頃、パソコンで文章作成しているせいか、たまに手書きすると書きたい漢字が出てこない。我が貧脳は、即時変換してくれる便利さに順応しまくって、欠損状態を正常と判断しているに違いない。物忘れが激しくなってきただけかもしれないが……情けない。(B)

◆市街地では史跡の標柱を見かけても、史跡自体が遺っていないことが多い。山中の石仏や塔は往時の庶民の息づいていた証。石の面を手でなぞる。四季それぞれの風景の中に立つ姿を眺める。そして、太平山系の山々の懐の深さを感じる。(K)

◆退職して4ヶ月が過ぎ、田畑の仕事で屋外で過ごす時間が増えた。農作業は機械を使って行う作業もあるが力仕事も多く、長く続けていると腕に力が入らなくなり、筋力や握力の無さを痛感する時がある。農作業を一つの筋トレと考えて、筋力アップも図ってゆきたい。(T)

「海市」第4号

2016年6月16日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方

《九月末秋田市で、加才信夫、柴田正夫、佐藤炳、新田鐵治、今野湧泉、原田耕作等の諸氏に会って種々語り合ふことが出来た。何かみたされないう心情を、初秋の千秋公園でさびしいながらあたたか話し合つたことなど追憶される。》(十一月号、後記)

頻繁に交流しているが、この時、「詩叢」はいうまでもなく、「京大俳句事件」について語られることがあったとしても、翌18年12月、「蠟座」にまで弾圧が及んでくるとは、思いもしなかっただろう。そして畠山義郎じしん、徴兵検査で甲種合格となつた。